

Title	マックス・シェーラーに於ける「愛」について
Sub Title	The "Love" on Max Scheler
Author	小泉, 仰(Koizumi, Takashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1954
Jtitle	哲學 No.30 (1954. 3) ,p.103- 126
JaLC DOI	
Abstract	The "love", by M. Scheler, is the most important emotional act which combines his personality-theory with his value theory. To know the characteristics of his love is sufficient to understand his ethics. He defined "love" as the only movement bringing from the "lower-being of the value" to the "higher-being of the value". We see, here, not only the characteristic of Plato's "eros", but also the more profound creative one in his personalistic love. Moreover, he thought it to be the unifying principle of personalities. It is analogous to Aristotle's "philia", but he recognized the eminent significance on the phenomenological conception of "mit-vollzug der Gottes-liebe", and founded his love upon it. Therefore, we can say, his love implies the Platonic and Aristotelian characteristics, and also unites them on the Christian love. So it is my purpose to make these characteristics clear. And next, I intend to discuss the realized forms of the love in the communities, especially the "Neighbours's love" and the "Love to humanity" and their relationship.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000030-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マックス・シェーラーに於ける

「愛」について

小 泉 仰

一、愛と他の諸情緒作用との區別

マックス・シェーラーの倫理学には、実質価値論、人格主義、情緒主義の三つの根本思想が流れていることは、衆知の事実である。

これらの思想の流れは、相互に相関連し、交錯しつつ流動しているのであるが、特に、人格主義と実質価値論とを、結びつける役割を果しているのが、情緒主義であると云えよう。私は、上述の意味に於て、情緒主義の最も根幹をなす情緒、即ち、シェーラーの愛について考察しようと思う。我々は、彼の愛の本質特性の究明を通して、一方には、彼の価値論を、他方には彼の人格主義思想を、より立体的に考察する手段の一つを得るであらう。

さて、シェーラーの愛作用の本質特性を考察するに先立って、まず、屢々、他のものと混同されがちな愛概念を、

マックス・シェーラーに於ける愛について

他の作用から區別することから始めよう。

愛は、普通、愛アルトリス・タインツ・ニヤクト、他作用、エゴイズム、自愛主義等アウトエロタイシズムスと混同されがちである。シェーラーによれば、愛は、これらから峻別しなければならぬ。何故ならば、愛他作用は、本質的に他者としての他者に向う作用として特徴付けらるものであり、それは、かえって、自己を憎むが故に、他者を愛すると云う自己憎悪ゼルフスト・ハツセにもとづけられている逆向作用であるからである。しかるに、愛は、自己のみを愛するとか、他者のみを愛するとか云うような、「自我」及び「他我」の關係点に独立なものである。云いかえれば、愛には、自己愛も、他愛も存在するのである。(註1)

従って、愛は、エゴイズムや、カントの解した自愛主義とも全く區別されねばならない。エゴイズムも、自愛主義も、自分の「環境」ウムツェルトを、自分の「世界」ワエルトと思ひ、自分の「環境」の幻想的所与性を、自分の「世界」ワエルトと思ひあやまる幻想と云う自己中心主義から派生したものであつて、この幻想が、意慾や、実践的態度に關連して云われると、エゴイズムとなり、愛の態度について云われると、自愛主義となるのである。従って、エゴイズム及び、自愛主義に於ては人格と世界の領域への志向が、全く没却され、唯、自己固有の「環境」のみが、エゴイストの生きる「世界」となる。(註2)そこでは、何ら愛の対象としての私の個的自己ゼルフスト(人格)は、与えられないし、「聖」ハイレスと云う概念の中にあらわされる所の最高価値種の荷担者として扱えられることもなく、「他者の中の一人」として、「私」は、Stephanの中に与えられるにすぎない。自己ゼルフストは、自己の個的親近的自己を全く隠蔽している社会的自我として生きて居り、そこにとらわれている。それ故、シェーラーの愛が、自我、他我の關係点に相対的な方向をもつことを、拒否すると云うその事に於て、すでに全く、エゴイズム、自愛主義と無關係である。前述の如く、愛は、夫自身、自己愛ゼルフストリーとして働き、亦、他愛フレマドリーとして働く。愛は、自他の方向に關せず、対象の如何を問わずに、対象に於ける積極的価値の存在へ向う作用

として規定される。愛と価値との関連に関しては、次節にゆずり、更に、他の混同されがちな作用との比較、区別を続けよう。

さて愛は、亦、情緒作用である所の好意、尊敬、同情、からも峻別されるべきのみならず、かえって、

これらの諸情緒作用をもとづけるものとなる。何故ならば、好意は、第一に、愛には全く必然的でも、本質的でもない「幸福」への方向を有して居り、第二に、「他人」に対してのみ向けられ、第三に、一種の「保護者の愛顧」と云うべき、「上から」注がれる態度であり、最後に、動能として、一つの目標を有する故に、対象との間に何らかの価値判断、又は、目標を前提している点に、或対象との間に距離を介在させているからである。

しかるに、シェーラーによれば、愛は、好意を抱きえない事物、美、認識、芸術、神に対して向い、「幸福」に対しても、積極的価値の荷担者である限りの「幸福」に向うにすぎず、それは、全く直接的に対象と関連する自発的作用であるが故に、好意と全く区別されねばならない。従って、亦、愛は、或判断の遂行（又は、価値判断の遂行）が前提となるような尊敬とも、区別せられる。

愛は、価値対象に直接関係する。積極的価値は、愛の働きによって、価値対象の内に発見せられ、その価値が、価値認識、意欲の段階を経て、実現さるべき内容と云う目標となる。それ故、好意の如きシエトレーベンも、尊敬の如き価値判断を前提とする情緒も、この意味で、予め愛によって、もとづけられているのである。

最後に、シェーラーと共に、近代英国倫理学の試みた愛の事実を、同情に帰する誤りを拒止して置こう。

シェーラーによれば、同情は、第一に、価値との関連に於て、常に、受納であり、一切の感得と共に、機能であった。従って、それは、反作用的態度である。之に反して、愛は、夫自身価値と関連するが、決して機能ではな

く、精神的^{アクト}作用であり、心情運動である。

従って、前者が、自我中心^{イッヒ}より發するとすれば、愛は、人格と結びついた自發的作用であつた。

第二に、情緒の方向を考えるに、愛は、既述の如く、決して、自他の方向に關係するものでなかつたのであるが、同情は、この点、むしろ、社会的作用として、常に、他者に対する作用方向を有するのである。

例えば、「自分をあわれむ。」と云う現象は、自己を同情するのではなくて、自己が、他者となり、他者の位置にある自己が、自己自身を眺めるのであつて、同情の本質は、常に、他者の方向を失わない所に存する。このような虚構の中で、人は、自己を同情する。

しかるに、愛は、自己愛、他愛のいずれも存するが、かかる虚構とは、全く無關係であり、同情と次元を異にする作用と云わねばならぬ。

最後に、一切の同情は、愛によつてもとづけられ、愛なくしては止んでしまふものであり、同情の係り合う中枢層は、常に、同情をもとづける愛の対象に依存してゐるのである。

それは、次節に於いてふれるやうに、愛が、価値認識作用 *Fühlen, Vorziehen, Nachsetzen* をもとづけると云ふ意味に於いて、明らかである。

以上、愛を一切の他の情緒作用から区別し、それが、高次の作用として、他の諸作用の基^キ付^ケけるものとして、浮彫にされたのである。しかしながら、我々は、未だ、愛の具体的本質特性にふれてゐなかつた。

今や、愛の積極的考察を行わねばならない。

(註1) Max Scheler: Wesen und Formen der Sympathie, 1948, 5 aufl. p. 162~163.

(註2) a. a. O., p. 63, p. 162~164

(註3) a. a. O., p. 153

(註4) a. a. O., p. 160

二、愛の第一の特性——創造的特性

さて、愛の具体的な本質特性を考察するには、先ず、価値との関連に於いて、これを見る必要がある。何故ならば、この見地からの考察は、愛の本質特性を赤裸々に書き出すのみならず、彼の実質価値論と情緒主義との関連をも、含んでゐるからである。

さて、シェーラーに於いては、愛は、夫自身、価値と関連するものであった。愛は、積極的価値である限りの積極的価値を実現する作用として、生命的価値対象、心的価値対象、精神的価値対象の何れにも関連する。

故で、問題となるのは、価値対象に対する愛の把握の仕方である。価値対象との関連をもつ情緒は、価値認識作用も含まれる故に、我々は、愛の独特なる対象把握の仕方を、考察せねばならない。

シェーラーによれば、愛は、価値を荷う一切の具体的個的对象が、対象にとつて、且、対象の理想的規定に従つて、可能なる最高価値に到達する運動として規定せられる。或は亦、対象が、対象に本来的に存するその理想的価値本質に達成する運動として規定せられる。^(註1) 而も、かゝる愛運動の作用圏について云えば、愛が対象を把握するとき、その対象の *Sosein* が、^{エクスステンツィアルレンジン} 現存的存在にも、^{ワエントザイン} 価値存在にも、いずれにも、なほ未規定であるような存在段階に於いて、

マックスシェーラーに於ける愛について

把握する。^(註2)

従って、云わば、価値存在、或いは、現存在に対して、予め先行された存在段階こそ、愛作用の作用圏であり、かゝる先行的存在段階に於いて、前述の積極的価値開示の働きをなすものであると云えよう。

それ故に、受納を本質とする価値認識作用と本質法則的に区別されねばならない。

このやうな作用圏をもち、且、運動特性をもつ愛が、実に具体的に、如何なる運動であるかを、考察することによって、我々は、より明らかに、一切の他の作用と異った特質を把握することが出来るであろう。

シェーラーによれば、価値が、具体的に価値事態、或いは、価値統一として、個体にあらわれる場は、^{サルト}周囲である。この周囲に属する所の「価値あるもの」、或いは、其他一切の事物、即ち、^{サルト}周囲事態は、我々の知覚内容及び知覚内容の対象と、かの客観的に考えられた対象との間の中間領域に属する。而も、このやうな中間領域としての周囲は、価値統一及び価値事態のみならず、一切の注意領域、関心領域、知見領域を包括するものであり、従って、周囲は、直観的全体として、単に、知覚の一切の内容にとっての^{ヒンゲル}背後根拠をなすのみならず、そこから、それらの内容が、汲み出される貯水槽^{レスポール}を形成してゐる。

亦、それは、価値の面から云うならば、^{ヴァイクル}実践的に、^{ヴァイクル}現実的に、体験される価値世界、価値領土である。個体にとっては、周囲は、個別に与えられて居り、従って、狩人の周囲に属する同一の森林と、山林の持主の周囲に属する森林とは、全く異なるものである。

それ故、この周囲に対しては、各人の一切の注意、関心、知見等の機能も、各人の周囲を超えて活動することは許されず、各人の情緒作用たる、かの価値認識作用と云えども、この周囲にあらはれる価値及び価値事態に対して、

吸収機能^{アブソーブメンション}として受動的に働くに止まり、これを超えて進むことは出来ない。

例えば、価値優先作用は、周囲に与えられたより高い価値を志向することが出来るけれども、周囲に於て、価値のより高くあることを志向することが出来ない。

この意味で、以上の一切の作用及び機能は、この周囲を越えたり、或いは、突破したりすることは出来ない。

周囲に於て、人は、さまざまのものを求めることも、顧慮することも、注意することも出来る。しかし、これらの一切の作用及び機能に対して、それらに依じて、周囲は、たしかに、鋼の如くかたい壁である。

かゝるかたき壁を突破つて、私は、他者の周囲に突入することを許され^(註3)ない。

各人は、各人の周囲に囲繞せられて、相互に越えがたい隔絶をもつ。

かゝる周囲に対して、愛が如何なる役割を果すかの問いが、今や我々の問題となる。

さて、既述の愛の本質定義によれば、愛は、対象にとって、本来的に存するその理想的価値本質に達成する運動であつた。

このような愛は、個体を取りかこむ周囲に対して、他の一切の作用及び機能をもつてしては、なしえなかつた独自のはたらきを示すであろう。何故ならば、他の一切の作用及び機能は、周囲に対しては、全く消極的、受働的働きをもつて、本性とし、周囲に属する価値、価値事態にのみ、志向し得たにすぎないに反して、愛は、それまで、周囲に属しえなかつた対象の理想的価値本質を、あらわにするからである。従つて、この新しい価値は、全く周囲にとって未知の価値であり、愛を通して、周囲に開示せしめられた価値なのである。それは、「愛が、存在者の感得に近づく価値領域を拡大する作用^(註4)」であるが故に、そうである。未知の価値の出現は、このような価値領域の拡大と云う愛の

経験に於て、達成せられる。而も価値領域が、我々の価値認識に与えられる限り、亦この価値領域は、我々の周囲に所属する。

それ故、周囲にとって全く未知の価値、若しくは、価値領域が、愛によって開示されることは、周囲の拡大を意味する。

従つて、愛は、まさしく、周囲の拡大と云う積極的はたらきを荷うものと云つてよい。

或いは亦、愛の作用は、周囲と云う「鋼のごとく堅い壁」を、この意味で、突破る運動であると云つてもよからう。それ故、愛は、とざされたるものから、ひらかれたるものへの運動である。

かゝる主体的価値発見的役割を演ずるものは、シェーラーに於ては、愛のみである。

かくして、「愛は、我々の価値把握に於て、本来的に価値発見的役割を果し、——而も、この役割のみを果し——その過程に於て、屢々、新しいより高い価値が、即ち当面の存在者には、全く未知の価値が明るみに出され、閃光の如く輝きつゝ現れでる運動」と云われるのである。^(註5)

茲に、愛が、独自の明証性を持ち、我々の「精神の眼」を開かせる由以が存する。^(註6)

愛は、常に、最高価値実現の方向運動として、この周囲を拡大し、未知の価値領域、価値領土を開拓する「開拓者」、又は、「先導者」であり、^(註6)他の作用によっては突破り得ない鋼の如くかたい壁を突破り、周囲にとちこめられた存在をして、新しい可能性へと向わしめるものに外ならない。

この意味に於て、愛は、抵抗なき愛でなければならぬ。人間は、堅き壁にかこまれながらも、亦、一方、この抵抗なき愛に於て、おのが壁を突破りつゝ進む。その最も純粹なる形態は神の愛である。地上に於ける神の愛は、亦、イ

エスの愛であつた。それ故、ヤスペルスが、彼の著、「基督教とニーチエ」に於て、「如何なる抵抗も行われぬ。無は否定され、一切は肯定さる。かゝる態度こそ、イエスの愛である」^(註7)と指摘したことは、上述の意味での愛の最高形態を画いたに外ならぬ。

人間の愛は、神の愛の分有者として有限的でありながら、なほ、かゝる愛の特性を保持する。尙、神の愛と人の愛との係り合については後述するであろう。

さて、上述の如き主体的、創造的愛は、三つの現存在形態グライザインツォルミンに従つて區別された生命的愛、心的愛、精神的愛に於て、夫々、具体的に活動する。即ち、生命的愛は、生命的価値一般のより新しく、より高い価値の存在への方向運動として、優れた輝しい生を、平凡な生氣のない沈滞した生より優れたものとして選び、亦、心的愛は、心的価値のより高い価値の存在へと向いながら、夫々、現存在形態を異にしつゝも、常に上述の主体的役割を果すのである。

茲で、我々は、愛が、存在しないものから、存在するものへの運動と考へられたプラトンのエロスに思い当る。即ち、愛の創造的意義は、すでに、プラトンのエロスの性格が、あらわす所のものであり、シェーラー自身、この愛のエロスの運動本性を肯定している。^(註8)

然し、プラトンのエロスは、知と無知、美と醜、善と悪、との中間的存在者として、後者から前者へ到ろうとする運動であるとは云え、尙、それは、目的に到達せんとする努力又は、*Streben*であり、追求であつて、この点、シェーラーの愛と性格を異にする。即ち、実現すべき内容と云う、所謂目標ツィェルをもつものは、*Streben*であるに反して、愛は、むしろ、かゝる目標に、はじめて向うのではなく、直ちに、積極的価値の存在実現へ向う運動である点に、エロスとは、次元の異なる存在段階に立つことは、既述の愛作用の存在段階に関する解明によって、明らかである。

この意味からは、積極的価値の存在実現への愛の原初的運動に導かれて、初めて、シエトレーベン作用（エロス）は、働きうるものである。従って、愛は、エロスのうちに、働くのであるが、しかし、エロスは、すでに愛そのものではなくして、価値に関する作用一般と区別された意欲作用が附加された段階に於ける現象である。

従って、エロスは、未だ、個的人格と直接に関連し、人格作用と云われるものでなかったに対して、シエラーの愛は、後述するごとく、個的人格作用であり、亦、一次的には、神が、愛の主体であった。

それ故、シエラーは、愛の純粹なる本質を、エロスの段階より摘出して、そのあるがまゝの相貌に於て、これを捕えんとし、この意味で、プラトンのエロスを、個的人格作用として探く掘り下げ、真の創造的意義を与えんとしたと云うことが出来よう。

- (註1) M. Scheler: Wesen und Formen der Sympathie, p. 174. (1948, Aufl. 5)
- (註2) M. Scheler: Vom Ewigen in Menschen, Leipzig 1921. p. 639.
- (註3) M. Scheler: Der Formalismus in der Ethik und Materiale Werethik, Hall, 1927, 3 Aufl., p. 139~149.
- (註4) a. a. O., p. 268.
- (註5) a. a. O., p. 268.
- (註6) a. a. O., p. 268.
- (註7) K. Jaspers: Nietzsche und Christentum, Niemeyer, Hameln, p. 18.
- (註8) M. Scheler: Wesen und Formen der Sympathie, p. 166.

以下次のように参照文献を省略することとする。

- M. Scheler: Der Formalismus in der Ethik und materiale Werethik: Der F. in d. E. u. M. W. e.
- M. Scheler: Wesen und Formen der Sympathie: W. u. F. d. Sympathie.

三、人格愛としての愛

前節に於て明らかにせられた愛の主體的、積極的活動は、人格に対しては、人格開示への方向運動として示される。

今、シェーラーに従って、人格に対する愛を考察するために、彼の引用した次の命題について考えよう。即ち、
„Verde du der du bist.“ 「汝のある所のものとなれ」と云う命題である。(註1)

命題中、先行する「汝」と、関係節中にあられる「汝」とをくらべるに、明らかに異なる存在である。即ち、後者の「汝」は、現実的存在としての「汝」、若しくは、平常的、日常的「汝」に対して、話者の用いた人称としての「汝」である。

之に反して、先行する「汝」は、之と異なり、「汝」が、本来有する所の理想的存在としての「汝」を表している。従って、理想的存在としての「汝」は、「汝」の中にひそむ本来的人格を意味すると云ってよい。

従って、この命題の真意は、日常的「汝」の内にひそむ人格をあらわにすることにありと云えよう。而も、シェーラーにあっては、人格の顕現は、価値秩序に於ける最高価値たる人格価値の存在を意味し、人格は、

云わば、人格価値を荷うのである。

従って、日常的「汝」の内にひそむかゝる人格をあらわにせしめる働きは、愛に外ならない。何故なら、愛のみが、かゝる特性を荷っているからである。

しかしながら、茲で、人格と愛との係り合については、他の諸対象と愛との係り合と全く異なることに留意しなければ

ばならぬ。

例えば、現存在形態から見た生命的愛及び心的愛とそれらの対象との係り合は、常に愛がそれらの諸対象を直接に対象とするのである。即ち、身体、肉体、及び自我と、それらの各領域は、前述の二形態の愛の対象となりうるのである。

しかるに、精神的愛、特に人格への愛は、前二者との間に非連続をもつ。何故なら、シェーラーに於ては、人格は、作用の対象にならないからである。^(註2)

この意味では、人格への愛は存在しないと云うべきである。それでは、人格と愛とは、如何なる係り合に立つものであろうか。

シェーラーによれば、人格が与えられる唯一にして独自の仕方は、たゞ人格の作用遂行そのものであり、その作用遂行に於て、人格は生きつゝ、同時に自己体験するのである。

実に、作用が人格存在をもとづけるのではなくて、人格の存在が一切の本質的に異なる作用をもとづけると云う関連に立ちながら、何も、人格開示の場は、人格の作用遂行そのものであると云うのである。人格は、作用遂行的存在としてのみ体験せられるが、作用の「後」^(註1)に、或は、作用を「越えて」^(註2)存するのではない。^(註3)むしろ、作用は、人格の荷担者の役割を果していると云うべきであり、この意味では、作用は、人格を、自己の背に荷っていると云うべきである。

人格と作用(愛)とは、このような独特の係り合をもつて居り、この意味では、愛は、人格と云う作用主体から始まると同時に、この作用主体たる人格の創造と云う二重の在り方を、愛の作用遂行のうちに、現実的に実現すると云

える。而も、この二重性は、二重の在り方でありながら、人格の作用遂行そのものに於て全く二重性を失って、具体的に一元化されるのである。即ち、愛の作用遂行そのものは、同時に、人格の作用主体の活動であり、人格の顕現及び創造を意味するからである。

上述の人格と愛との独自の係り合を考察した後に、我々は始めて、シェーラーの人格愛を、具体的に考察することが許される。

今、人格愛としての他愛^{フレムトリーベ}を例として取上げて考察しよう。

他愛とは、自他の関係点から区別せられた他我^{フレムト}への愛である。従って、他愛には、他人格に向う愛も、他の自我に向う愛も、亦、他我の肉体に向う愛も存する。

しかしながら、我々が、茲で問題とするのは、他人格へ向う愛のみである。

さて、他我を、便宜上、「汝^{ドゥ}」とするならば、「我」が「汝」を愛する他愛が問題となる。上述の関連から、この他愛に於て、「我」の愛遂行そのものの中に、「我」の人格が、愛の背に荷われて開示することは、容易に導かれる。しかし、一方、「我」の「他愛」は、「汝」の人格へ向う作用として、「汝」の人格存在実現の運動として遂行される。

かゝる愛の積極的運動の内に、「汝」の人格は、この愛の内に、開示への方向をもつ。

従って、愛に於て、「我」の人格と、他我たる「汝」の人格とは、同時に開示する筈である。

所が、この愛は、「汝」の人格に向う他愛でありながらも、「汝」の人格を対象として遂行することは全く拒止されていたのである。

それでは一体、「汝」の人格が、「我」の他愛の内に於て、果して開示されるのであらうか。又、開示されるとすれば

ば、如何なる仕方で開示するであらうか。茲に、従来の分析を以って示された愛の作用本質に対して、加わるべき、「汝」の人格開示への道としての、第二の重要な愛の作用特性が問題となるのである。

(註1) M. Scheler; W. u. F. d. Sympathie, p. 171~172.

(註2) " ; Der F in d. E. u. M.W.e., p. 401~402.

(註3) " a. a. O., p. 399.

四、愛の第二の特性——人格結合の原理

さて、「汝」を愛する「我」の愛が、「汝」の人格を完全にあらわにする所の、従って、愛を充全たらしめる所の第二の特性とは如何なるものであらうか。

シェーラーによれば、それは、すでにアウグスチヌスが指摘した「神の愛の共遂行」と云ふ概念の中に含まれている。

さて神の愛とは、愛の二つの種、自己愛と他愛とに従って、二つの最高形式を有する。即ち、神自身に対する神の愛(神の自己愛)と、世界に対する神の愛(神の他愛)とである。換言すれば、神自身が、自己創造、自己愛によって、創られたこの世界を愛する所の神の他愛であり、他方、神が神自身を愛する自己愛である。

従って、神の愛の共遂行とは、神自身に対する神の自己愛の共遂行、*amare Deum in Deo.* であり、世界に対する神の他愛の共遂行、*amare mundum in Deo.* との二つの仕方 of 共遂行である。従って、神の愛の共遂行とは、人間の愛が、神の他愛と自己愛とを、共に遂行することである。^(註1)

それ故、「汝」に対する「我」の人格愛は、神の他愛——即ち、神が創造せられた「汝」なる人格を神が愛し給う他愛を、「我」なる人格が共に遂行する所に、初めて成立する。けだし、神は、無限の愛であり、神の愛によって創造せられた人間も、亦、神のいぶきを受けて、神の愛の一部を分有するからである。

それ故、シェーラーに於いては、神の愛に立戻ることによって、「汝」に対する「我」の人格愛は、「汝」に於ける自己愛と他愛とを、共に遂行することが出来るのである。神の愛は、まさしく、人格愛の根源であり、之を基礎づけているのである。

この愛の共遂行に於て、初めて、「我」は、「汝」の人格愛を遂行し、かくて、「我」の愛の中に、汝の人格が、その背に荷われて、顕現することが出来る。

「汝」の人格に対する「我」の愛は、神の愛の共遂行にもとづけられて、「汝」の人格が愛する所のものを愛し、「汝」の愛する汝の人格（自己愛）を、共に愛することである。而も、かゝる「汝」との共愛の内に、初めて、「我」なる人格が生きて共に、「汝」の人格も生きる。

この意味から云えば、「我」の人格愛としての自己愛と他愛とは、かゝる「汝」に対する「我」の人格愛の内に、一元的に具体的に遂行されると云わねばならぬ。

けだし、自己愛と、他愛とは、自他の関係点に関連した場合の愛の種であり、本質的には、人格愛は、かゝる神の他愛の共遂行、即ち、「汝」に対する「我」の隣人愛の内に、遂行されると云うべきである。このような隣人愛の中に、「我」の人格と、「汝」の人格とは、全く同時に開示されるからである。

かくして、自己の救済と他己の救済とは、それが人格に関して云われる限り、別のものではありません、常に、同時

に、かゝる「汝」と「我」との人格愛の共愛、即ち、隣人愛の中に果されると云つてよからう。

それ故、「我」が、「汝」を、没我的に愛することに於て、自己否定しつつ、「汝」の人格を肯定するが、他方、同時に、「我」のかゝる愛の遂行に於て、我の人格が生き、顕現される意味に於て、自己肯定的となるのである。

さて、上述の如き、自他の人格を開示する所の共愛 *mitlieben* と云う作用の中には、他方、自他の人格を結合すると云う役割を果すことが、その本質的な特質として要求される。

何故ならば、「共に」、*mit*、なる概念には、たゞ単に、「我」の「汝」に対する一方的関係が、含まれているだけではなく、むしろ、「我」の「汝」に対する関係と共に、「汝」が「我」に対する関係も、含まれているからである。それ故、共愛——愛の共遂行——は、「我」が「汝」に対する関係として、「汝」の他愛と自己愛とを、「我」が共に遂行するのみならず、同時に、「汝」の「我」に対する関係として、「我」の他愛と自己愛とを、「汝」が、共に遂行すると云う係りが、意味されている。

即ち、「我」に於ける他愛は、必然的に、共愛に於て、「汝」に於ける他愛を呼び起さねばならない。云わば、「我」の「我」に対する「愛し返すこと」が要求せられている。

シェーラーによれば、愛は、必然的に人を駆り立てて導く所の愛であり、「本来的には、愛は、愛し返すことの要求をひそめて居り」^(註2)「AのBに対する愛は、Bに於けるAへの返愛を——抑制するような原因がない時には——呼び起すだけでなく、愛し返すBの心情の中に、必然的により暖い、より生を躍動させる所の愛の力一般へ向う傾向をも、呼び起すのである。このようにして、亦、C、D、に対するBの愛が、勿論、呼び起され、この流れが、道德的宇宙に於て、C、D、から、E、Fへと、流れて行き、無限へと注ぐのである」^(註2) 茲で、愛し返すことは、再び、一切の

愛の本質特性を荷う道徳的荷担者となる所の、一次的積極的愛として働くのである。

愛と返愛（愛し返すこと）とは、共に一次的愛として、共遂行の作用特質を物語るものである。

他面、上述の如き、無限へと披り行く愛の傾向は、「価値の荷担者なる故に、一切のものを愛し、亦、悪人も、愛する」筈である。

何故ならば、例えば如何なる罪を負える人間と雖も、人間として、彼の本来理想的に存する人格存在を、可能的に所
有する。従って、彼の罪の蔭に、現実性とならしむべき彼の人格存在が、本来的にあるのである。而も、唯、愛のみ
が、——そして特に、彼自身の愛が自ら働き得ない事情にある場合——彼に対する愛のみが、彼の返愛を、呼び醒ま
し、彼の心の中に、強く馭り立てられて、愛の焰を点じ、更に進んで、彼自らの積極的愛を、湧き上らしめるに到る
であろうからである。かくて、彼の愛の内に、そして、愛の共遂行の中に、悪人も亦、人格開示の場を与えられ、彼
自身の救済も亦、果されるであろう。

かくて、愛は、「共に」と云う現象学的体験の内に、自他の人格を、堅く結びつけ、愛に生きる限りの悪人も、
その中に結びつける所の愛共同体の原理として働く。而も、愛の協同体の成員は、神の愛の共遂行者として、神の前
に、唯、追ゾラナルクシヤフト従ゾラナルクシヤフトの關係に立つが、神の愛の共同の責務を荷うものとして、相互に對等の關係に立つのである。(註5) 茲に、
シェーラーの所謂、神を中心とする愛の連帶性ゾリググライティの原理が成立する。(註6)

かくて、人格愛は、本来的には、神の愛の共遂行として、相互人格の開示の働きであり、夫自身、共愛作用を本質
とするものであり、人格相互の結合原理として、協同体を基けるものであつた。

かゝるシェーラーの愛の本質特性は、かのアリストテレスの究極的な親愛フイリヤの本質相貌を有していると云えよう。し

かしながら、親愛は、人と人との間にのみ成立する所の、共同体の原理であったが、シェーラーに於ては、愛が、一次的主体としての神に属するものとし、神の愛の共遂行と云う独自の意義を含むことによって、他面、プラトンの、創造的運動特性をも、包括することが出来たと云えるのである。この意味では、シェーラーの愛は、プラトンのエロスと、アリストテレスのフィリアとの両者の本質特性を、その内に含み、キリスト教的、アグネスチヌスの愛の下に、更に深い綜合を得たものと云うことが出来るのである。

- (註1) Max Scheler; W. u. F. d. Sympathie, p. 177.
 (註2) " : Der F. in d. E. u. m. W. e., p. 556~560.
 (註3) " : Vom Ewigen in Menschen, p. 158.
 (註4) " : W. u. F. d. Sympathie, p. 175.
 (註5) " : Vom Ewigen in Menschen, p. 155~159.
 (註6) " : a. a. O. "
 " : W. u. F. d. Sympathie, p. 177~178.

五、隣人愛と人類愛

以上、愛の本質特性を考察して、愛の協同体に及んだのであるが、最後に、協同体愛の関連に、眼を転じよう。さて、愛の種としての協同体愛には、隣人愛、家族愛、祖国愛、人類愛が、含まれるが、茲では、特に、隣人愛と人類愛との関連を見るつもりである。

茲で、愛の種とは、前述の所で明らかなように、愛の存在段階そのものにあつて、すでに性質分化を示している性質であり、愛の対象となる所の変化する容体や、その共通標識を視向する必要のないものである。

さて、隣人愛に関しては、前節に於て、詳細に論述したのであるが、シェーラーに於ては、これこそ、人間にとつて、最高の道徳的価値充実を伴う愛であつた。

之に反して、人類愛は、人間にとつて、本質的にその充全なる働きが、不可能になるのである。^(註1)

何故ならば、今、人類愛が、家族愛、祖国愛、人類と拡大して行く所の人員を包括する同一の情緒であるとするならば、かゝる人類愛とは、人類単位への愛として、次のような価値を通してのみ、常に必然的に愛となるからである。即ち、その価値とは、フランス人、イギリス人、ドイツ人としてでなく、人類と云う^{ガットウング}類の単なる「範例」としての個人及び個人の総計に帰せられる価値である。

これは、常に同時に最低価値であり、一次的には、感性的快適価値にすぎないと云うのである。^(註2)従つて、それは、最高人格価値を目ざす人格愛としての隣人愛と比較することは出来ない。

しかしながら、一方、我々は、人類を次のような存在^{ヴァーゼン}として捕えることが出来る。即ち、人類を、「人間」と云う^{ガットウング}類とは全く異つた^{コレクティブ}集合^{インディヴィデュム}的個体として捕えるならば、人類は、かゝる個体の全歴史過程に於ける一切の人類であり、それは、大きく生き、戦い、悩む存在であり、世界の *allganze* と対峙するものである。

かゝる個体は、愛の対象として存しうる。亦、この個体こそ、その内に歴史の一切の価値と一切の最高価値とを含んで居り、実際には、これこそ、各国民、民族以上に愛するに値するものである。

然し、このような価値をもつ「個体」は、一体誰に与えられるであらうか。所が、「人間としての人間は、再び愛

作用の荷担者である」と云う前提の下では、かゝる個体は、決して人間に与えられない。人間は、常に愛作用の荷担者に止まるのであって、愛そのもの、無限の愛そのものとなることは出来ない。荷担者は、常に、神の愛の分有者たるに止まる。無限の愛そのものであるのは、神のみである。

従って、愛の荷担者としての人間にとっては、人間が所属する部分集会個体と等しい充全度を以って、このような歴史の本質を規定する全体的集合個体全体、即ち、人類が、与えられない。人間の愛作用には、より大きな圏の成員としての個人性の価値は、より小なる圏に於ける個人価値と同じ充全度を以って与えられないのみならず、返って減少して行くものだからである。

即ち、人間の量が、増大しても、感得される価値は、次第により低い末梢的価値になる。或いは、人格価値から感性的状態へ移行すると云う本質関連性があらわれるのである。^(註3)

それ故、人間にとっては、例えば、祖国愛は、人類への愛よりも、本質法則的には、価値ある愛である。何故なら、祖国は、本質法則的に、人間一般の可能なる経験に対して、「人類」よりも、より積極的価値充実を表わすからである。^(註4)

従って亦、この論を押しつめて行けば、祖国愛は、家族愛よりも、価値充実の点で、劣る愛であり、更に、家族愛よりも、隣人愛が、より積極的価値充実を表わす愛であり、隣人愛に於て、人間の協同体愛に於ける最高道徳的価値が実現される筈である。

反面、神のみが、歴史的総体的個体としての人類を国民以上に愛し、神のみが、それを敢えてなし、亦、その権利を有するものである。換言すれば、神のみが、この個体としての人類の理念——この悩み、喜び、戦う存在としての

この偉大なる理念を、その価値の充全を以って、把握しうるものである。

このように、人類は、神の愛に於て愛しうる存在であるから、人間の人類愛には、神の愛の共遂行によって遂行される場合にも、唯、人類への愛志向のみが存するだけである。^(註5)この事は、亦、人間の、神の自己愛に対する共遂行に於ても、云われる筈である。即ち、神に対する人間の愛は、神自身に対する愛として、充実せられることはありえぬ。人間は、愛の分有的荷担者であつて、全く無限なる愛としての神を、充全にあらわにすることは、全く拒止されている。たゞ、そこでは、神自身に対する愛志向が存するだけである。

茲に再び、人間は、有限的存在者として、神の愛に對して、分有的にのみ共遂行すると云う係り合が、示されている。さればこそ、「人間の愛は、この宇宙的な、一切の内に、一切のものに即して、現実的である力(神の愛)の特殊の変種、もしくは、一部分機能にすぎない。」^(註6)

とは云え、一方に於て、神が事物を愛するように、出来るだけ事物を愛すること、そして、固有の愛作用に於て、神と人間との作用が、価値界の一点に於て一致するように、相交錯する所を、洞察的に、共同体験すること、この事が、人間に可能な最高善となる。^(註7)

其故、眞の愛は、常に、神の愛の対象である人類への愛志向を、把持している。それが、積極的に価値充実されるものではないとしても、常に志向する。これは、価値界の開拓者としての役割を果す愛に於て、本質的なものである。

一切の最高なる価値を包括する人類と云う個体への愛、そして、この個体の有する最高価値実現へと向う愛の運動特性は、見逃されてはならない。

この意味では、家族は種族及び部族と云う常に共志向された価値の背後根拠の上に、愛され、亦、部族は、民族の価値のそのの上に、民族は、国民の、国民は、人類の価値根拠の上に愛されるのである。

而も、前述の如く、人類は、人間の愛から隔絶された価値対象であって、決して、人に与えられるものではないが、人類愛は、愛志向に於て、常に祖国愛より以上に価値充実さるべきものたること、そして、神の愛こそ、この愛の積極的価値充実を、完成すると云う事実が与えられていることを、忘れてはならぬ。

しかしながら、かゝる人類愛を充実しえない人間にとって、それにも拘らず、人類愛へ、つながる道が残されている。

神の愛の分有的荷担者たる人間にとって、最高の価値充実を与えられる所の隣人愛が、それである。

何故ならば、最も個的なるものに向う愛ではありながら、隣人愛は、常に、個的人格(我)と個的人格(汝)とを、積極的価値充実に結びつけるものであるからである。

而も、隣人愛は、常に、強い吸引力として、個と個とを結合して、無限へ流れる特性を荷うのである。それ故、隣人愛に於て、具体的人類個体への神の愛が、人間の立場からは、最高の充全度を以って、共遂行せられることが、許されて居り、茲に、神の愛が、現実的に働くからである。

それ故、「なんじ、力をつくし、思をつくして、主たる汝の神を愛すべし。亦、己のごとく汝の隣人を愛すべし」のキリストの命題は、神の愛と隣人愛との上述の深い意味関連を含んで居り、人間にとっては、むしろ、同一なる愛とを意味するものと云えるのである。

我々は、相互に、個的人格愛を通して、愛による個的人格相互の協同体を、荷っている。而も、かゝる協同体こそ、

眞の意味の人類を構成する。即ち、それは、あくまでも、人類の一部でありながら、亦、個々の人間にとっては、あくまで、分有的共遂行者として、限界づけられながらも、無限へと連帯して行く隣人愛の内に、我々は、人類愛の實現を監視しているのである。

この意味からは、隣人愛こそ、人類愛の門戸を開くものと云わねばならぬ。或いは亦、個的人格の隣人愛こそ、人類への愛である。

我々は、愛に於て、人類全体から、逆向して、最も個なるもの（他）へ、向う愛に生きることによって、逆に、再び、人類への方向を、把持できらるであらう。

愛が、常に閉ぢられたるものから、開かれたるものへと向う運動であることが、茲に於ても、その意義を失わない。何故なら、人類愛の充実が、人間にとって拒止せられるとしても、尙、隣人愛を通して、常に人類へ向うことが、許されるからである。

この意味に於て、最も遠きものへの愛は、最も近きものへの愛を通して、實現への方向を辿ると云わねばならないのである。（了）

(註1) M. Scheler; W. u. F. d. Sympathie, p. 192~210

(註2) " ; a. a. O. p. 202~206.

(註3) " ; a. a. O. p. 203

(註4) " ; a. a. O. p. 204

(註5) " ; a. a. O. p. 205

- (註9) M. Scheler; Ordo Amoris p. 237,
(註10) " ; a. a. O. p. 223